



柳生武藝帳

卷之四

花 車

五味康祐

柳生武藝帳

卷之四 花車

昭和三十三年十一月三十日 發行
昭和三十三年十二月三十日 三刷

定價貳百六拾圓

地方
賣價 貳百七拾圓

著者 五味康祐

發行者 東京都新宿區矢來町七十一
佐藤亮一

印刷者 東京都千代田區神田神保町三ノ二二三
塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

發行所 東京都新宿區矢來町七十一
株式會社 新潮社

電話東京三四局代表七一二(九)
振替東京八〇八番

製本 神田加藤製本所

卷之四
目次

透すか

2

鐸

५

山

伏
の

四

女

お

杖

師

二

雪の上の足

迹あと

050

檢

死

—

花

車

八五

直

門
第

子

五五

女

儼

六

遺

書

三六

道

梅

111

神

今

食

IV

湖水渡り	二三
一葉浮水の構え	二三
袂の裏	四四
叢餞	五五
無刀取り	六六
先驅け	七六
逆立ち	八七
妙安寺	九八
所司代一	一〇八
所司代二	一一〇
六十六部	一二一

裝幀・挿繪

木下二介

柳生武藝帳
卷之四

透^{すか}し 鏢

「や、やられたわい。……」

黎左衛門は刀を把った左手の指四本（拇指を除く）をバラリと切落されて頓狂もない悲鳴をあげた。思わず、落ちた指を拾おうとする。

その時にはもう桂原は身を翻えして千四郎と清姫を追うた。

「姫。……姫。……桂原四郎右衛門にござりますぞ。とどまりなされい。——姫……」

太刀は鞘に収めてある。往反する旅人が驚いて道を左右にあける間を疾風の如く駆けた。次第に千四郎との距離が縮まった。

千四郎の方は清姫を抱えているので日頃ほど輕捷でない。

「姫、お主自身で駆けられぬか。多三郎に會えるのじゃ。がんばってくれい……」

體をゆすって勵ましたが、清姫は失心せんばかりで、土を蹴る聲音が遂に背後數間の近さに迫った。

千四郎は覺悟をした。走りやむと、清姫を背後にしてくると桂原へ向き直ったのだ。

桂原も歩度をゆるめて、停る。

暫く雙方ただ火の如き呼吸を吐いて對峙した。

桂原四郎右衛門が視線を移した。

「姫。——桂原にござる。それなるは姫が父君に敵對致す一派の者。何卒お離れ下されよ。拙者、主命によってこの者を斬らねば相成らぬのじゃ。」

肩でする呼吸が、いくらか桂原の方が大きいのは彼我の年齢の差であらう。

ゆっくり千四郎が言った。

「もはや知っておろうが當方、霞の忍者千四郎じゃ。永井信濃守がこの千四郎を斬れと申したとは奇怪。——姫、聞いておかれいよ。御身が間違えられたとおりの千四郎、多三郎とは雙生兒じゃが、考えること我等兄弟はひとつ。進むべき方向も、與する立場もひとつ。されば多三郎を慕われる御身は、父に仇召される。父上がとうといか、多三郎を大切とお思いか。とくと肚をきめられい。」

そう云って、少しづつ雙方で間合を詰める。

清姫は氣が動搖して事を判斷する餘裕はない。

「やめてたもれ四郎右衛門。何も、斬り結ぶほどのことないのではありませぬか。話せば分りましょう。やめて、……千四郎どの、おやめなされておくれ。」

おろおろと唯言う。

兩者にとつては、だが女の意志など最早どうでもよかつた。一瞬氣をゆるめた方が斬られる。異様な殺氣に、旅人が息を詰めて見成っていることにも氣をくばる餘裕はなかつた。

相手が何者かは、無言の睨み合ひで既に一切は感知しあつてゐる。武藝帳に名をとどめる兵法者と、その武藝帳の入手をはかる青年忍者と。

道幅は左程廣くなかつた。千四郎が先ず刀の鐔を指で押した。千四郎得意の抑え斬りの身構である。四郎右衛門は身をいくらか沈める構え方で、これは肘を張り氣味に柄へ手をかける。いずれも同じ新陰流——小指一本が確と柄を握れば其の場で太刀は閃めいて勝負がつく。

千四郎が遂に先ず抜いた。それにかぶさる如く四郎右衛門は斬りつける。清姫は顔を蔽つた。勝敗は決した。

「姫。……と、殿のお側へお戻り下されましよう。……」

絶叫したのが四郎右衛門の最期である。優劣をきめたのは鐔の差だつた。

鐔はもともと透し彫りのないのを尊ぶ。地の厚味はうすいがよい。厚い鐔は、敵の刃を受け止めるに便利であるが、その爲に重くなりすぎ、差し方によつては鞘走ることがあるからである。普通の熟練した武士なら、だから厚い鐔は心掛けて用いない。

併し忍者は鐔のひろく大きいのを使う。時には鞘ごと大地に立て、鐔を踏臺に土堀などを乗越える用意である。桂原四郎右衛門は自身の武藝に陰の忍びのわざを含めることを自戒し、鐔を普通のものよりむしろ小ぶりで薄くした。紙一重の差で雙方の切先が交叉したとき、四郎右衛門の

斬込む刃は千四郎の鐔にとまり、千四郎の打込んだ切先は、鐔を削って相手の眉間を割ったのである。

清姫は眞青になり、不幸な家臣の亡骸を呆然と見下した。

千四郎は太刀を拭った。

「致し方ない。わしが、さもなくば斬られておった……。姫、この光景を目のあたり致された以上、もはや我らと旅は出来まい。やむを得ぬ、この場にて某は別れ申す。——あの川野黎左衛門もし無事なれば、やがて此處へ追って参ろうで、何なら同道致されるがよいぞ。武藝はともかく、人柄は無類の善人。御迷惑はかけ申すまい。」

聞いているかいもないかも判じ難かったが、千四郎はそれだけを言い残すと、

「——御免。」

さっと矢のように西へ向って走り出した。

それから二日経った。

鈴鹿峠から猪鼻の立場にかかる道中を見下し、巨木の枝にまたがって眼下を通る旅人を密かに監視していた武士がある。

名におう鈴鹿山は、八丁二十七曲り。道は狭くて峻しく、清水が所々に湧出して雨の日は越え

得ない。峠の茶屋は澤という立場で、甘酒を賣る店が多く、此の邊が伊勢と近江の國境になる。左に清淨山十樂寺、子安觀音などを望んで鞍骨坂をこえ、猪鼻をすぎると蟹が坂の立場にいたる。猪鼻では家々は黄色の飴をひきぎ、又、經木の如き物を紙で貼って黒く塗り、水呑と稱して賣っていた。

武士が木に跨っていたのは、その鞍骨坂のあたりだった。十一月の末ともなれば例年ならもう一帯に降雪を見るが、この年は暖冬でまだそのきざしがない。

旅する者は、いずれはその必要と事情あつて家郷を出たものだろうから、この僥倖を欣び、次と峠を越える。商人あり、馬を叱咤する武士があり、あわれな婦人の一人旅もある。いずれにも樹上の武士は目迎え、目送したが、

「おかしい……わしは、あやまったかな？」
と獨りつぶやいた。

それから又幾人かが通り行き、通り來った。

丁度、そうして朝から二刻近くも過ぎた午前である。

「……」

武士の眼が急に光りを帶び、樹上から身をのり出した。

「あ奴か……」

とうめいた。

東海道を京へ向う多くの旅人とは反對に、急ぎ足でこちらへ登って來る人物がある。笠に顔をさえぎられてよくは見定め難いが、歩行ぶりに常人と異って異様な輕捷さがある。

「あ奴じゃ。——まさしく霞の多三郎——」

言つたと思うと、猿の如くスルスル幹を這い下りた。

岩頭に一度佇立すると、眼下を行く笠の移動を見下して、やが聽てななめに自らも勾配を走り下り、坂の曲るあたりでボンと丈餘の崖を飛び降りる。

歩いて來た男はぎくつと立停つた。

「久し振りじゃ霞の多三郎。——わしを覚えておるかい。」
と言つた。

たしかに男は多三郎である。笠の庇をあげ、

「知らぬ。柳生一派の者か？」

「ふざけるでない。——鍋島忍者じゃ。」

「何？」

「覚えがあるう。その懷中にいたした巻物、もと我らが手にあつたを、島津公より淀藩を経て清姫どのが所持となつた……おめおめお主に奪われては、鍋島よりその行方を見守つて來たこのわしの術が立たぬ。——のう、柳生を相手に立廻るほどのお主じゃ、この弓削ゆげ三太夫、勝負する

に不足はないぞ。」

陽焼けた顔にうっすら不敵の笑みさえうかべて言う。

年は三十前後。

右頬にえぐったような刀疵があるが、凄いほど苦味走った美丈夫である。

道は片側は山の岩肌、片側は目のとどかぬ谷間である。

弓削三太夫と名乗った忍者が、少しずつ移動してその谷の斷崖を背ろに構えた。忍者なら絶壁はこわくない。多三郎が逃亡を企てれば谷をえらぶにきまっているからである。

「そうか。……お主が弓削か。」

肚をきめたらしい。多三郎ももう持前の逞しい面構えに戻って、これ又ニヤリと破顔をした。

「いかにも清姫どのが所持したという武藝帳、今この懷中にあるが、そう簡單には渡せんな。」

「當り前じゃ。お主からだ取返そうとは云わぬわ。いのちともども受取ろう。」

「よい。——取ってみい。」

正面きって、忍者同士の對決なら白刃を交えることもなく、いっそ氣が軽いのだろう、思うさまに術を使う奇妙な愉しさすらあってか、どちらも不思議な微笑をうかべた。

「この儘やるか？ それとも、場所を變えるか。」

多三郎が訊いた。

「ふざけるでない。水邊でならお主にかなわぬが、山ではわしが術のものじゃ。動きはせぬ。」

「よし。ならばまずお主が消えい。」

素早く手で菅笠を脱ぎ捨てた。

「見破るか？」

弓削三太夫が言う。弧を描いて多三郎に抛られた笠が樹林の谷間へ落下していった。

忍者は術を競って敗れば即ち死ぬ。掟でなく巧拙の^{ことわり}理である。姿を消すというのも呪文となえてバツと消えるお伽話のあれではない。通行する旅人の歩行を^か藉りて身をくりますのである。

忍者同士なら、原理は分っている筈だが、それでも猶、視覚の盲點を利した遁走が可能とされた。一種の錯覺を利用するという。萬一その術に^てのつて暫時でも相手の姿を見失えば、不意を襲われ刺される道理だ。術の敗北が死を意味するわけである。

弓削三太夫が先ず通行する商人の歩行に乗って姿をかくした。直ちに多三郎は喝破した。

次に多三郎が雲水に寄添うと見ると忽ち姿を消した。三太夫は佇立して、凝^{じつ}乎と地面をにらんでいたが、

「見たぞ。」

と言った。はるかな頭上の梢から多三郎は降り立った。

次に三太夫が掌中の目潰しを投げた。粒状のそれが道幅ひとつを飛ぶ捷さより多三郎が三太夫の隣りに移り立つ方が早かった、と、見た目には見えるのである。多三郎の手に、投げられたば